

# ラヴェルとサウジー共著『詩集』(1795年)について

西園寺 明治

## I

J・ワーズワスは、ウッドストック版のサウジーの1797年刊の『詩集』<sup>1</sup>(以下『1797年詩集』と略称)への序で、ワーズワス、コウルリジと対比しながら、『1797年詩集』の時点ではリードしていたのはサウジーであった<sup>2</sup>と書いている。また、コウルリジは1794年9月の時点(オックスフォードでサウジーに出会ってから3カ月ほどが経過)で、サウジーへの書簡(1794年9月18日付)に、「私の心を知っているだろう。徳でも詩才でも君が私より優れていると実感するのは私にとってうれしい」<sup>3</sup>と書いている。

私はサウジーの『ジャンヌ・ダルク』に関する稿<sup>4</sup>で、両者の影響関係についても触れたが、コウルリジが思想的に(特にユニテリアニズム的宗教思想で)サウジーに影響を与えている一方で、サウジーが詩の領域や具体的な詩材・表現でコウルリジに大いに影響を与えていると感じた。その時は『ジャンヌ・ダルク』初稿と初版にあらわれた変化及び合作の状況を通しての実感であったが、今回はもう少し遡って、サウジーの初期の詩の世界(1795年刊のラヴェルとサウジー共著『詩集』<sup>5</sup>、以下『1795年詩集』と略称)を(コウルリジに会う前の彼の書簡も参照しながら)概観してみたい。コウルリジの詩の展開を論じる際の貴重な照会事項になるはずだと確信している。

## II

はじめに断っておかねばならない。この『1795年詩集』はR・ラヴェルとサウジーの共著であるが、ここではもっぱらサウジーの詩にだけ焦点を絞る。

詩は、全体を掲載順に3つのグループに分けることができると思う。

最初のグループは、「回想」Retrospect、「ロマンス」Romance、「ウルバヌスに」To Urban、「吝嗇家の邸」The Miser's Mansion、「ヒュメーンに」To Hymen、「もてなし」Hospitalityの6編からなる。この部分に、詩集の基本的なスタンスが示されていると思う。

第2のグループはソネット群だが、16編のうちサウジーのものは10編である。それらはさらに(1)恋人アリストテに関するもの(4編)、(2)人生または生と死をテーマとするもの(6編)に大別できると思われる。

第3のグループは、(1)同じタイトルを持つ2編の「リコンに」To Lycon、(2)「ロザモンドよりヘンリーへ」Rosamund to Henry(修道院からの書簡という形式をとっている)、(3)戦いや死を前に各民族に向けた大指導者達、オーディン、モーゼ、マタティアの訓告4編の、計7編からなる。それぞれかなり長い詩である。このグループの詩は、ほとんどの行が一人称で表現されている。<sup>6</sup>

### III

巻頭の「回想」のタイトルページには、W. L. ボウルズBowlesからの引用がある。

…だれも聞く者もなく、苦しみに  
絶えず泣いている人生の広野に  
友もなく投げ出されたわれらの歩む路は孤独で長い。  
…  
歩みながら歌の魅力を求め  
旅路を愉快にし、…。<sup>7</sup>

G. C. ベドフォードBedfordに宛てた手紙で、サウジーがボウルズのソネットと「回想」を関連させて語っているところがある。

オックスフォードを出て、旅をした。途中駅馬車を待っていたのが、以前通っていた学校が近い川のそばだった。12年過ぎても記憶は失っていなかつ

た。その時ほど孤独にかつ好ましく半時間を過ごしたことはない。やがて馬車が来て、ブリストルへ発った。

子供時代の諸場面の回想には心に楽しい憂鬱（pleasing melancholy）を与える何かがある。…こうした主題についてボウルズがとてもきれいなソネットを書いている。

[ここに“To the river Itchin near Winton.”が引用されている。]

このソネットの作者は、今日の第一等の詩人だが、良く知られていない。彼はオックスフォードのトリニティ学寮にいた。僕は彼のソネット集しか見ていない。数がなく手に入れにくいので、友人が筆写してくれ、とてもよかったのでそれを僕も写した。<sup>8</sup>

サウジーが引用しているボウルズの詩の主人公は、何の特権もなく苦しい旅（人生）を、詩を慰めにして、辿っている。当時大いに評価されたボウルズの『14のソネット』も、全ソネットが旅行者を主人公にしている。人を単に理性知や社会性（国家人）としてのみ見るのではない。社会に容れられないゆえの放浪という場合も有るだろうが、いわば一時的な離俗だろうか。私的な抒情世界が展開され、それが認知され始めている。それは、人生全体にも係り政治や思想とも関連を持つだろうが、まずもって個人の感情世界である。もっとも、ボウルズの『14のソネット』が支持を得たのは、それなりの深さがあったからだろう。激情ではなく、内面化した落ち着いた「悲しみ」がそれである。

「回想」は、自分の恋人に、自分の通った学校のあるコーストンCorstonを語る形をとっている。入学のため母親と初めてその学寮を訪れた時の、教師の優しさや学校のたたずまいの良さに安堵するが教師はそれ以後は厳しかったこと、母との別れの悲しさ、その後の学校での生活、河・木の実などの些細な物事の、苦しさが含まれているにもかかわらず「甘い回想」。それらが「思い出が樹の幹に刻み込んだ名前のように、変わらずに残る」のは、「心労が心を圧迫し始めるまえのこと」だからだ。「学識のある旅行者たちは喜んで有名な古戦場跡や古代遺跡を巡ることだろうが、私は私の心を打った家庭の変化（the changes of

domestic life) に注目したい。」コーストンでの時も過ぎ去り、知人は居なくなり楽しげな声も聞こえない。「もう十分だ。……立て、わが心よ。もっと価値ある感情がお前のものであるべきだ。道を行け。信じて進め。あとは天に任せて。」

J・ワーズワスは、ウッドストック版ボウルズの『14のソネット』への序<sup>9</sup>で、8番目の「イチン川に」To the River Itchenとコウルリジの「オター川に」To the River Otterに言及している。まず、「イチン川に」は、オックスフォード大学トリニティ学寮のフェローであり桂冠詩人、ボウルズのチューターでもあったT・ウォートンWartonの「ローデン川に」To the River Rodenの影響を受けている。さらにコウルリジの「オター川に」にも言及しながら、J・ワーズワスは、ウォートンにはグレーGrayやゴールドスミスGoldsmithの感じがあるが、彼のノスタルジアはより個人的で、より思いに沈む感じがある。ソネットという形式にも新しい声が入っている。さらにボウルズは感覚の輝き、それ自身のための感情を詩にあたえている。ウォートンは「痛みの悪寒」(shiv'ring sense of pain)とは言わなかったろう。コウルリジの放逸self-indulgenceと心を静める悲しみsoothing sadnessは、ボウルズに由来している。「オッター川に」の強い喪失感と荘厳な瞬間は、ボウルズのおかげである。「滑らかな薄い石」「渡り板」は、新鮮な個物。「透明な流れのなかの砂の色の輝き」では、物が子供時代のヴィジョンや心の働きの象徴となっている

と言っている。このような影響関係でみると、ボウルズに傾倒したサウジーもこのような側面は吸収していると思われる。ボウルズの詩の引用部分の冒頭にそれは含まれているし、「回想」本文中にも「苦しさのある過去」とある。しかし、ボウルズの詩がソネットでサウジーの詩がオード（無韻詩）という違いに由来しているのかもしれないし、回想対象の年齢がサウジーの方が幼いということもあろうが、サウジーの詩は、懐かしさを「心労が始まる前の子供時代のうれしい記憶だから」<sup>10</sup>、と客観的理性的に判断して、そうした感覚へのこだわりよりも将来へ目を向ける。深い情感を持ってコーストンを思い起こしているのだが、それらに対するサウジーの最後の態度は、「乾いている」とでも言いたい感じを伴っている。

ボウルズのソネットでは「悲しみ」がとても重要だと思われる。<sup>11</sup>「心労」を経た後の「悲嘆の喜び」(the joy of grief)(実は、これは『1797年詩集』のサウジーの言葉でもある<sup>12</sup>)というような情感が、サウジーのこの詩にはまだ明白ではない。先のことになるが、コウルリジの『1796年詩集』に「ボウルズへのソネット」があり、こう書いている。

ずっと私はあなたに感謝してきました、ボウルズ。そのやわらかい調べの悲しさ(sadness)が私をなだめる (soothes)。…<sup>13</sup>

J.ワーズワスの上掲の言葉通り、このソネットのコウルリジの方が、はっきりボウルズの特徴を掴んでいるようである。浸み込み内面化した「悲しみ」。心労がまだ訪れていない年齢を通り過ぎた者が、その後に達すべき心情としてコウルリジはボウルズのこの落ち着いた悲しさ、悲しさを内に含んだやわらかい調べを重視している。

ボウルズは『14のソネット』の中で‘sorrows of mankind’という表現さえ使っている。<sup>14</sup>サウジーの『1795 年詩集』はコウルリジに出会う前に書かれたものだが、交流のあとの『1797 年詩集』では、サウジーは「落ち着いた霊は、悲嘆の喜び (the joy of grief) を愛する」と書くようになる。コウルリジとの交流のあと、ボウルズやコウルリジが、滲むようにサウジーの詩に入り込んで行ったのではないか。

とはいえ、サウジーは「回想」で、「家庭の変化に注目する」私人という立場をしっかりとらえている。政治や革命への関心とは別の自分の生活・感情の、だれにも譲れないもの。それがボウルズへの共感に繋がり明確な自己意識になっている。そして、一面でサウジーの優しい感情となり、他面でサウジーの一徹さ (G. ダイヤー Dyer への書簡中でコウルリジは彼を「垂直な徳の人」(a man of perpendicular Virtue)と形容している<sup>15</sup>) にもなっている。

そして出自はとても大きな要因かもしれない。サウジーは1793年12月11日付の H. W. ベドフォードへの書簡で、これまでの人生を振り返りながら、自分の父に関し次のように書いている。(ちなみに、転機に際しての人生の正面切った

回顧も、コウルリジよりサウジーの方が先行している。<sup>16)</sup>

父は小売商だった。それによって非常に羨むべき敬すべき凡庸さのなかで20年間幸せに生き家族を支えることができた。3年前手管の<sup>・</sup>かもとなり破滅した。冷血な兄弟は彼を助けず、ずるい友人のため裏書した小切手の額を払えなくて逮捕された。ホレイス君、彼は牢獄に入ったよ。解放されてやっと家に帰り、不幸に会ったことで心砕けて死んだ。私の心も砕けるか厚かましくなるかしたに違いない。このとても恐ろしい厄災の時に、私の無分別がさらに別の厄災を加えたのだから。間違った親切が父の不幸を隠していたとき、私は本の借金をしてしまった。家庭はもう心地よいものではなくなった。僕はいつも叔母と暮らしていた。<sup>17)</sup>

「小売商」の稼ぎによって「とても羨むべき敬すべき凡庸さ」の生活をもたらしてくれたが、「小切手の裏書」の責任をとられ投獄、そして「心砕けて死んだ」父の、こともあろうに苦しい時期に「本の借金」をして「厄災を加えた」サウジー。まるでトラウマになるような経験だったのではないか。叔母との後の生活も、文学や教育の点でサウジーに大きな影響を与えたようだが、父親の生と死は深層への影響を与えているように思われる。他方コウルリジは牧師館で生まれた。心の余裕が違っただろう。自然にしみ込むように入ってくる教養や文化、周りの人々の品位など。自分で左右できない出自要因は誰にとってもかなり大きい。この壁とトラウマのような心理に向けての格闘が、文学におけるサウジーの「プロ性(professional)を強く」<sup>18)</sup>させ、「垂直な徳の人」にし、思想を過激にした一因であろう。また先にも述べたように、他方では、彼に家庭を重視し、名声がなくとも一私人として大切な生活を送っていく覚悟（後にもう一度この点について触れる）も持たせた。

したがってこの詩は、サウジーの抒情の芯、トラウマなど様々な重要な要素を含んだ、起点であり、それゆえ冒頭に掲げられているのであろう。

次の詩「ロマンス」でその歴史が取り上げられている文学領域は、サウジーの

閉塞感を解放できる数少ない領域の一つだったのではないか。この詩は、そういう意味でサウジーの詩の中心となる長編叙事詩の根拠を示している。扱われているロマンスの種類は、以下の通りである。サウジーの紹介の仕方や語り口は省いて、順番に挙げる。

北欧神話：ロマンスの初期。

ヘリオドラスの『エチオピア物語』：僧の語るエチオピア。匪賊の棲家。愛。

（作者は紀元3世紀の人。）

ソラThoraとレグナー・ロドブログLodbrogの物語：デンマークの物語。

（Percyの*Reliques*参照。）

アーサー王伝説：円卓の騎士。ランスロット。トリストラム。

アリオスト『オルランド』

ゴッドフリー（第一次十字軍：イエルサレム王）

中世騎士物語：

（1）イングランドの獅子心王

（2）フランスのバラのロマンス

スペイン生れの初期の散文ロマンス

セルバンテス『ドン・キホーテ』

シドニー『アーケイディア』

スペンサー『妖精の女王』

ルソー

挙げられているのは、ギリシャ・ローマ時代以降のロマンス（叙事詩や物語）である。アングロサクソンの故地の北欧の神話を除いて、それらはキリスト教文化圏のロマンスでもある。このような性格を持ったロマンスの歴史をサウジーが想定し、素描したということだろう。『ジャンヌ・ダルク』の序でサウジーは、ギリシャ・ローマの叙事詩をあまり評価した書き方をしていない。サウジーは、『オデュッセイア』だけが例外的に自然と愛の物語になっていると説き、「トウルヌスよりアエネーイスが好きだ」と言う読者はあまりいないだろう。反逆の疑いをか

けられた移住者が、不届きにも妻を捨て、ディドをたらしこみ、捨て、ラヴィニアを夫から無理矢理奪うのである！人との交わりの中で自分が悪漢であることを証明するような神々に信仰心を抱いて何の甲斐があるか」とも書いている。<sup>19</sup>

オーディンの郷北欧の神話を始まりにルソーまでの西欧の文学的歴史の一面が、ロマンスの歴史として提示されている。サウジーは、ギリシャ・ローマ（キリスト教以前）や異教世界との境界をはっきり意識しているのではないか。北欧神話は非キリスト教文化だが、民族的にはアングロサクソンの根であり、サウジーは民族的な意識にも敏感だったと思われる。<sup>20</sup>

この詩で言及された作品・作家は、サウジーの作品のあちこちで取り上げられている。最初と最後のものについて例を挙げると、北欧神話はF. セイヤーズ Sayers の『古代北欧神話の劇によるスケッチ』 *Dramatic Sketches of the Ancient Northern Mythology* で接することができる。最初の作品「フレアの黄泉への降下」の黄泉の国の描写は、サウジーの『ジャンヌ・ダルク』の悪霊軍やジャンヌの夢の中の黄泉の国の描写に影響を与え（梟、蛇、ぬらぬらする生物、ドームなど）<sup>21</sup>、それはコウルリジの「老水夫の歌」 *Ancient Mariner* や「クリスタベル」 *Christabel* にまで影響が続いていると思われる。

またロマンスの歴史の最後に言及されているルソー（特に『エミール』）の宗教観や社会観・自然観も、『ジャンヌ・ダルク』に影響している。『ジャンヌ・ダルク』は、サウジーが、ルソーまでのロマンス史に自分のロマンス（叙事詩）を接ごうという壮大な意図で書いた作品だと言える。（勿論フランス革命への共感もある。）『ジャンヌ・ダルク』における愛、守護霊と悪霊軍の対立、夢での地獄遍歴などのシーンは、ロマンス特有の物語の仕掛けであるが、『ジャンヌ・ダルク』にはサウジーの考えているロマンス史の最初期の北欧神話とともに、最新のルソーの自然思想も取り入れられており、その意味で非常に野心的な試みだと言える。

ウルバヌスという名の中にイメージとして「第1回十字軍」があるなら、やはりそれにはサウジーのキリスト教という枠組みが意識されている。筆者が「ウルバヌス」(Urban) という男性名の友人に語りかける形式で書かれている。嵐とそ

の後の穏やかな日差しを対比し、人生と死に対するべき態度を語る。理性を失くした騒乱は嵐が収まるように早急に潰れる。われらは、節度と徳をわれらのものとし祝福を得よう。友情を育み科学にも助けをもとめ、家庭の喜びをわれらのものに。そうすれば、最後の死も恐れずに人生を歩むことができる。

「回想」よりもさらに「乾いた」（理性的）感じがするが、サウジーは、「回想」で心労以前の体験と家庭を、「ロマンス」で文学の花たるロマンスの総体を、「ウルバヌスに」で社会に生きるための基本的態度を、書いているように思われる。詩集の構想・範囲・思想が次第に明らかにされていく。

次にサウジーは、社会における失敗者の例「吝嗇家」と良き村民との対照的な生と死の具体例を描く。

昔日の名残を微かに留めはするが、「吝嗇家の邸」は今にも崩れそうな惨状である。煙突からは夜の鳥の声が聞こえ、破れた屋根からは空が覗く。人間がこのようにした。正義と憐憫がアヴァロ（所有者）に優しい（genial）心を与えれば彼自身が祝福されただろう。慈善で天の心を施せば、角櫓は厳かに立ち、門は友を迎え、村人も彼を尊敬しただろう。旅人は塔を見、慈善の人と讃え、彼は喜びの中で一生を過ごし、死に際しては、天使が寿いだだろう。

詩の内容は以上の概要で分かっていただけだろう。冒頭の4連は、クリスタベルの冒頭部分や、『ジャンヌ・ダルク』の地獄遍歴の部分をおぼろげに思わせる表現を含んでいる。「崩壊直前の、かつての富の象徴の、邸宅。……運命の定めなき変遷をおぼろげに思わせる。……庭の雑草、運河のぬらぬらした生き物。……梟、蝙蝠、鳥が不気味に鳴く。」

ここにもセイヤーズの影響がありそうである。セイヤーズに描かれているのはロマンスの歴史がその最初に北欧神話の中で捉えた地獄の描写として表現上重要な価値があるとサウジーは見做しているようである。「優しい」（genial）心を持っている「吝嗇家」は、その内面もその邸も、地獄の様を呈している。後にコウルリジが『老水夫の歌』で主人公が陥った「死中の生」を描く際にも似た表現がある。<sup>22</sup>そうした両者に共通の表現価値やイメージ価値をセイヤーズから発見して

きたのは、サウジーなのである。セイヤーズの作品から引用する。

バルドル[地獄に落ちたオーディンの息子]の嘆息も、洞穴で耳障りな金切り  
声をあげる

身震いするような悪霊たちに圧倒されるのか。バルドルの魂は  
死の梟の声に身震いし、

毒牙をもたげ、シューシュー音をたてる

斑の蛇から尻込みせねばならないのか。

耀く至福の場面よ、さらば。<sup>23</sup>

また、「優しい」genialについても言及しておきたい。コウルリジに会う前から「私の心を打った私の家庭の変化」への視点を持っていたサウジーだが、この点はコウルリジも共感したに違いない。サウジーに出会う前からユニテリアンとなりハートレーの『人間論』を読み、家庭や友人との情愛が基盤になって同心円状に神への愛まで広がってゆく愛の同胞世界を宗教的思想としていたコウルリジである。後の1802年にコウルリジが「私の優しい心はうまく働かなくなった」(‘my genial spirits fail’)と書いたとき、振り絞るようなその表現は、サウジーとの交流の時期を思い起こさせる叫びになっている。コウルリジは、サウジーをも、またサウジーのこの詩に出会ったはずの1794-5年のバンティソクラシーの当時の自分をも、思い出していただろう。

風の中の船、あのウィリアムの空のカヌー。

——私には、すべてが非常にくっきりと見えている。

いかにそれらが美しいか目には見えているのだが、感じるができない。

私の優しい(genial)心はうまくはたらかなくなった。——

だから、こうした[自然の]ものが、圧迫の重しを私の胸から

持ち上げるのに何の役に立とう。<sup>24</sup>

コウルリジは1802年当時においても「優しい(genial)心」は、感情や実感の基本とみなしていたことが、これで分かる。サウジーの『1795年詩集』はコウルリ

ジに会う前に書かれているから、コウルリジの「優しい」genialという表現(単に一般的な言葉として処理することはできないと思う)もサウジーからの影響と言ってよいと思う。

前の詩は、人生の失敗の例(吝嗇家)であった。では成功例とはどんな人物か。前の詩の邸が廃墟に近くなっているように、次の詩でもその人物の住居は朽ちてしまっている。だが、その「廃農家」の住人だった人の「死」は、詩の最後に近い部分で次のように描かれている。

ここは強く喜びや満足の住んでいた場所。

戻ってきた彼を家族が迎え、犬がじゃれつく。

彼の子供が縋りつき、彼の親が彼を祝福する。

...

そして麦を刈るように彼は熟して死んだ。

村人たちは彼を「飾りもなく葬った。」「村人みんなが、葬列に加わった。」<sup>25</sup>

これは市井の一私人(サウジー自身でもある)の「生と死」に関するサウジーの理念型であると思われる。書簡によると、文学上の成功もかなわず家族を養う職も得ることが出来なければ、彼はアメリカへ消えてゆく覚悟を持っていた。跡形なく消えてゆくだけの覚悟をしていた。家族や身近な人々とのgenialな関係の中で生き家庭に恵まれ、世間から忘れられて死んでゆくような「生と死」を選ぶ覚悟、である。先にも引用したが、このような生活はサウジーの父親が「小売商」として一家にもたらししてくれた「とても羨むべき敬すべき凡庸さ」の生活を、思い出させる。1794年、コウルリジに出会う直前、サウジーは進路のことで悩んでいた。6月1日、G. C.ベドフォード宛書簡で、聖職に着く目的でオックスフォードにいたが、「自分が親戚たちの重荷だという実感」を持ちながら、(欺瞞的な宣誓をして聖職に着くことで)「自分の誠実さと自己評価」を失ってしまう時(卒業)までの2年半をオックスフォードで過ごす苦痛について書き、そして次のように続けている。

一つだけ選択肢がある。そんな境涯かそれとも移民だ。これから6か月間

に正直な生活に着くか国を去るか。…惨めになるかもしれないが、悪漢にはならない。

ウィンWynnは、僕のためにできることをしてくれるだろう。僕が探っている思想を高く承認してくれている。公的境涯は将来の必要性というより、目の前の便宜の対象だ。自分の能力で結婚できるまで、オックスフォードと確実な生活を捨てる明白な理由が欲しい。…もう一人のひとの運命が僕にかかっているというのは希望でもあり恐れでもある。希望の中で生きるのは簡単、しかし、絶望を糧にしなければならないなら、僕の名も生活も知られていない国で絶望を糧にする。僕は、その国の職工の世界に入って、以前はもっと高い境涯の資格を持っていたことを次第に忘れていく。<sup>26</sup>

サウジーは、ロンドンで文学によって成功する自信についても論じているが、そうした成功や「公的境涯」の可能性とそれが叶わなかった場合の身の振り方の間で、悩んでいた。だが、誠実さと自己評価を犠牲にしたり、「親戚たちの重荷」になるよりは「職工の世界に入って」（妻とともに）アメリカに消えてゆく、という覚悟を持っていた。公務に着く可能性も全く不確か（イートンを過激な雑誌出版で放校になり、オックスフォードに来ているサウジーに公的道は閉ざされたも同然だった）で、結局サウジーには自分で成功への道を切り開くか、「職工の世界に入って」（妻とともに）アメリカに消えてゆくという極端な潔い道しか残りそうになかったのである。

ある意味でこの潔さは、積極的意味でも消極的意味でもサウジーの性格の重要なあらわれだと思われる。一方で政治的活動・思想上の過激さを、他方では家庭を重んじる静かな態度を、生む。

Aグループの残りの二作は、簡単な言及にとどめたい。

「ヒュメーンに」To Hymen（ヒュメーンHymenはギリシャ神話の婚姻の神）は、家庭の大切さとそれへのサウジーの憧れを語っている。最後の「もてなし」Hospitalityは、文明が進んで他人の魂に無感覚になっている社会に対し、むし

ろ未開の人々の持つ「もてなし」の資質の豊かさに肯定的に言及している。キリスト教社会の弱体化を嘆く。このあたりはサウジーの「優しい」genial精神から来るものであろうし、また未開のあるいは自然な精神を肯定的に語るのは、ルソーの影響も入っている。

Aグループの詩を検討してきたが、サウジーには明確な態度はあるが、体系的思想はないように思える。たとえば一つははっきり指摘できるのは、フランス革命に共感し、パブリックスクールで過激な主張の雑誌を出して放校の憂き目にあい、(フランス革命の強い影響下で)『ジャンヌ・ダルク』を書いたサウジーの活動的側面と、「職工として」アメリカへ消えていく覚悟に見られる彼の一私人のしずかで「優しい」側面とが、いわば断絶しているように思えることである。ロマンスではそれは繋げない。ここにコウルリジの体系的思考が影響を与える余地が存在することになるが、それは次の稿で検討したい。

繋ぐもの(思想的体系性・構造的性)が明確ではないとはいえ、サウジーのAグループの詩は、詩の基本的な価値や領域を広くカバーし、目配りが効いている。この領域の広さは、J. ワーズワス言うところの、サウジーのプロ性(professional)の強さによるものだろう。コウルリジに出会う前に既にサウジー自身が、1793年12月11日付のH. W. ベドフォード宛の書簡で「僕は、他のどの作家が僕の年齢時に書いたよりも、多く書いた」<sup>27</sup>という自負を述べている。また、J. ワーズワスは『1797年詩集』の序次のように書いている。

サウジーに想像力、精神の力、超自然感など偉大なロマン派詩人たちにあるものを探しても無駄だが、生涯を通じて非常にプロ性(professional)の強い熟達した書き手であった。彼の初期の詩も、時代に投じたその人間主義的humanitarian光のゆえに、特に読まれる価値がある。<sup>28</sup>

サウジーは、コウルリジと出会う前の1794年の時点でコウルリジを凌ぐ側面を持っていた。

#### IV

Bグループソネット群のアリステ詩群でサウジーは、空想の視力<sup>29</sup> (the eye of fancy) で、離れている時も心はアリステを離れず、彼女の心根の良さに安らぎを求める。またアリステはサウジーの詩神でもある。さらに画家が描こうとするような女性の美を既にアリステは自分で全て持っているが、アリステのしずかに明るく輝く穏やかな善良さこそ、アリステの魅力だと、彼女を讃美している。

19歳で僕は誰よりも多くの厄災を知った。ここで僕が心楽しくなる付き合いはフリッカー家の婦人たちだ。教育を一部分はともに受け、経歴も僕のように暗い。叔母は反対していて、めったに会うこともできないが、彼女らはそれを知っており同情してくれている。他には付き合いはない。<sup>30</sup>

とサウジーは1793年12月11日に書いている。パンティソクラシー計画の一方で、このフリッカー家の長女イーディスEdithとサウジーが、また次女のサラSaraとコウルリジがいずれ結婚することになるが、実際の結婚はパンティソクラシーの破綻がはっきりした1795年の末である。

詩のテーマとしては愛する女性の存在は、サウジー、コウルリジ共に重要性を持っている。これまでも述べてきたように、暖かい家庭はサウジーが詩に特別に取り上げている「市井の一私人の人生」にとって欠くべからざるものであるし、コウルリジにとっても家庭や友人の情愛は、神の愛まで同心円状に広がる愛の社会性の基盤である。愛する女性はそれぞれ意味合いは異なるが、思想的、象徴的な意味合いを帯びていて、二人の共感する部分であつたに違いない。サウジーの場合、愛する人は内面化し重要な位置を占めているが、象徴性は薄いように思われる。とはいえ、繰り返しになるが、愛する人とアメリカへ移民し、そこで家庭を営み無名の生活者となりおおせる覚悟がサウジーにはある。この点は、思想性には欠けるであろうが、むしろサウジーの一私人としての新しさ、現代性だったとも言えるのではないか。

次は、チョーサーが購入し晩年最後の2、3年を安らかに過ごしたといわれるダントン城を訪れた時の詩である。城は廃墟になっているが、詩人の詩は城よ

りも堅固な記念物として残り、空想(fancy)によって往時の華やかさを思うことができる。大詩人を詩材に、その晩年と死および詩の永劫性を扱っている。

サウジーは、人生の誤りやすさ、生と死の困難性と多様さという大テーマをよく思考し表現していると思う。ソネット6では、「弔鐘鳴る夕べ、一人静かな部屋で、人と死について私は考える。……希望と懸念の人生の調子の狂った場面を考えるのが好きだ。」<sup>31</sup>若いとき人は、光る氷をもてあそぶことに満足して、その玩具が溶けていくのにも気付かないと、サウジーは指摘する。サウジーの静かで落ち着いた、むしろ翳りのある態度が印象的である。

ソネット11「炉火に」は、自分の一生が「煙にも灰にも汚れず燃える」炉火のように、可能な範囲で皆を元気づけ、そのあと綺麗に消えてからは、子供たちが残った灰をじっと見るように深い思いを持って墓をみてほしい。家庭の温かさや人生の無名性がここでも詠われている。Aグループの「エレジー」の内容とほぼ同じである。サウジーには「野望」がないという評が（同時代の仲間によっても<sup>32</sup>、またJ. ワーズワスによっても<sup>33</sup>）なされているが、これはむしろサウジーの「（彼の父親のような）無名性という原型」の提示といって良いのではないか。この原型があるからこそ、政治的社会的な過激な主張も生まれ、また詩作では貧民や囚人の心情、民話やバラードといった形式を早くに手掛けることができたのだと思われる。

ソネット12の「萎れた花」は、まず摘まれ捨てられ萎れてしまった花を描写し、その近くに同じ運命を辿ったエマの墓があると、読者に知らせる。手前勝手(selfish)で恩知らずな(ungrateful)男に結局はもてあそばれて亡くなった乙女、その乙女と萎れた花を空想(fancy)で繋いでいる作者。そういう空想（想像力）の大切さにも言及している。それは思いやり(hospitality)や同情・共感という、サウジーが重要視する感情に通じる。

ソネット15は子供が巣立って顧みられなくなり、鳴くことがなくなってしまった親鳥の境涯がテーマとなっている。最後の3行、

もう何もお前に歌をせがむものはいない。

静かな森は荒涼とし、不機嫌で、

愛の調べに応えはしない。<sup>34</sup>

愛の欠落が、森全体を陰鬱なものにする。その内外の呼応が上手く描かれていると思われる。内界外界の呼応がこのように描かれている詩はサウジーにはあまり多くないと思われるので、特筆しておきたい。後に(1795年8月)、コウルリジがイメージする「風とイオリア琴」(自然と詩人)の呼応のイメージ<sup>35</sup>を思わせるからである。コウルリジの詩のイメージの高い象徴性はないが、サウジーの詩も要をヒットしていると思う。サウジーの焦点は、しかし、子供の巣立った親鳥の孤独な境涯の指摘にあり、「無名者」の家庭にも孤独な変貌の訪れる可能性を指摘しなかったのだろう。何ごとも確かではない、と。

ソネット16は、「反省」Reflectionの苦しさを訴えている。「何故私が／沢山の過去の悲しみを繰り返さなければならないのか。」「反省」が幸運な人々のところにも訪れて、「穏やかで柔らかな回想の光がかれらの胸に」差し、「死すべき人間の茨の曲路を」彼等にも考えさせて欲しい。反省は共感と思い遣りのきっかけとなると、サウジーは暗示しているようである。

## V

Cグループは、次の3つに分けられると思う。オーディンに関する二つの詩の大部分の行と他の詩の全てが、一人称の語りの形式をとる。

### (1) 2つの「リコンに」

「リコンに」は二つとも、友人と思われるリコンに人生体験について語る。人生の苦しみにによって落ち込んだ悲嘆(Grief)の不毛から脱するためには科学が必要であり、また、歌を作り自分を宥めるのもよい。そして「名声の港」へたどりつけるように、「そのように、リコンよ、生きよ。嵐に逢ったら私を振り返れ。」サウジーにとってこの詩にある「科学」は何だったのかわからないが、「回想」の「割り切りの良さ」をここでも感じる。悲嘆(Grief)は、コウルリジ的ボウルズ的な深く浸み込み落ち着いた悲しみの側面がない。「悲しみ」は、ボウルズで

はほとんどsorrowが使われている。「回想」を論じたところで、サウジーには「家庭の変化に注目する私人」の立場があることを指摘した。だが、やはりそれは「悲しみ」とはニュアンスをことにする。サウジーの悲嘆Griefはそれよりももっと激しい悲しみである。抜け出すべき、克服すべき「悲嘆」である。コウルリジが『1796年詩集』のボウルズへのソネットで使っているのはsadnessである。melancholyという語も使われている。コウルリジはボウルズの悲しみを正確に受け取っていると思われるが、サウジーはどうだろうか。

第2の「リコンに」は第1の「リコンに」とは趣を異にする。人生には様々な浮沈があるが、最後の最後に幸せに微笑まれば良い。それが願いである。死後私の墓は分からなくなっても良い。私は静かに眠る。壮麗な罪に加担したくない。膝に来る孫が同じ生を送るように願う。死ぬ時が来たら葬礼は要らない。子たちがわが骨をうずめてくれればよい。無名で生き、死して忘れられるように。

作詩などのサウジーの当時の努力をみると、彼に野望が足りないとは、とても言えない。前にも述べたように、努力には自負を持っているのだから。前述のとおり、サウジーには2面がある。市井のなかへ消えてゆく覚悟と、「名声の港に着く」欲望と。その二つを、同名の二つの詩にしている。面白い発想だと思う。パンティソクラシーに熱心に打ち込んでコウルリジを叱咤激励しているサウジーと、夢破れコウルリジと分かれてポルトガルへと去ってゆくサウジーの、いわば二つの姿が、思い浮かぶ。他方、サウジーが去ったあと、コウルリジは運動の理念を別の形で継続すべく、定期雑誌『ウオッチマン』*The Watchman* 創刊に向けての努力を続ける。

## (2) 「ロザマンドよりヘンリーへ」

愛する人がありながら高位の人の誘惑にのって犯したたった一度の罪が、ロザマンドを汚し、ロザマンドはクリフォード家の名誉を汚した。その罪で僧院生活に入る。その後に僧院から愛する人に宛てた悔恨の書簡の形を取る詩である。女性の地位を重視するサウジーであるので、女性の失敗と苦悩にも心を用いている。女の貞節の危うさ、男の手管という破滅の罠がテーマである。弱者への共感と言えよう。弱者に思い遣りを持ちえない社会（ここでは王や恋人）への批判もあろう。

ここまでの3編は、一人称で友人に語りかけ、書簡の形で恋人に懺悔する。ここからさらにサウジーは、『1797年詩集』では、弱者・下層民・犯罪者に一人称で語らせている。〔「ポータニー・バイ・エクログ」ほか。〕その意味で、詩語の革新でもサウジーは先んじていたと言えるのではないか。詩語に関してサウジーは、1794年1月24日付のH. W. ベドフォードへの書簡で、R. グラヴァー Gloverの「レオニダス」に言及しながら、

コリンズと 그레이の模倣者たちは詩にぎこちないイメジャリーや煩わしいメタファーを詰め込んでいる。私もその轍を踏むことがよくあったので反省し日々矯正している。平易さこそ全て。(Simplicity is all in all.)<sup>36</sup>

と書いて、平易な表現の重要性にも早くから言及している。いわば、下層民の一人称の言葉やバラードがその先にあり、サウジーの中の「市井の一人」の覚悟や「思い遣り」・「共感」がそれを後押ししているだろう。ここでも優しさと過激さは別のものではない。

### (3) 民族の大指導者達の訓告

アングロサクソン族は、ローマ軍に追われて北方に移り、スウェーデンのウプサラ地方に建国したとされる。「オーディンの一族」The Race of Odinは、スカンジナビアという厳しい土地と歌を愛する自由な人々による、ローマへの復讐の戦いへと部下を鼓舞するオーディンの訓告である。これには明らかに現代的テーマ（フランス革命をめぐる）が含まれている。『ジャンヌ・ダルク』もそうであったし、スカンジナビアの神話は『ジャンヌ・ダルク』にも出てくる。コウルリジはサウジーの影響を受けて、北欧の神話・物語などに（『ジャンヌ・ダルク』への寄稿においても）言及している。

次に「オーディンの死」The Death of Odinでは、ローマへの復讐の戦いへと民族の勇気を鼓舞し、自らは胸に刃を突き立ててヴァルハラ（神界）へと去るオーディンに、主に一人称で、語らせている。

約束の地カナーンへ向けての民族の行進を主導するモーゼ。そしてカナーンを前にしながら、約束の地を踏むことを許されていないモーゼが、真の固い信仰

の重要性を訴え、死をかけて戦う勇気を鼓舞する「モーゼの死」The Death of Moses。指導者の地位を離れての、モーゼと妹との情愛も語られる。

次の「マタティアの死」The Death of Mattathiasは、シリア王からユダヤ教団の政治的宗教的自立（400年ぶりの独立）を獲得するマカベア一族の戦争の第一歩となる戦いを導いたマタティアの、その民族への彼の死を前にした激励である。

特にCグループでは、自由や解放のための民族の戦いを導く指導者というテーマが際立っている。抽象的な理念としての自由ではなく、民族の長く望まれた困難な自由のための戦いがテーマである。フランス革命の理念をめぐるのは、17世紀の理性を論理的基礎にした思想家もいるが、サウジーは明確に「民族」raceや「国」nationの解放や自由を語っている。『ジャンヌ・ダルク』もまた、そうであった。

最後に少し先のコウルリジとの関連で付言すると、サウジーの『1795年詩集』の最後がモーゼとマタティアの宗教的な詩で終わっていることは、コウルリジの『1796年詩集』の最後が「宗教的瞑想」Religious Musingsという大きな宗教的思想詩で終わることに、大いに影響しているであろう。サウジーのCグループの詩のテーマや素材は確かに巨大で、民族やキリスト教が扱われてはいるが、それらがロマンス内の設定にとどまっている感を起こさせる。コウルリジの『宗教的瞑想』のような思想体系的描写がなく、またロマンス的な設定に体系的思想が内包されているとも言えないと思われる。(120920)

#### (注)

- 1 Southey, R.(1797). *Poems 1797*. A Woodstock Facsimile(1987).
- 2 *ibid.* Introduction.
- 3 Griggs, E. L.(ed.) (1966). *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* Vol. I, The Clarendon Press, Oxford. 104.
- 4 西園寺明治「サウジー『ジャンヌ・ダルク』の初稿と初版」熊本学園大学 文学・言語学論集 第17巻第2号57 - 87.

- 5 Lovell, R. and Southey, R. (1795). *Poems 1795*. A Woodstock Facsimile(2000). (ただし、1795年初版のタイトルは、*POEMS: containing THE RETROSPECT, ODES, ELEGIES, SONNETS, & c.* である。)
- 6 唯一の例外は、このグループ第3番目の「オーディンの一族」The Race of Odinである。他の作品は全て一人称の語りである。
- 7 Southey, R. (1795). *Poems 1795*. A Woodstock Facsimile(1987). 1.
- 8 Curry, K.(ed.) (1965). *New Letters of Robert Southey*. Columbia University Press.Vol.1. 52-3.
- 9 Bowles, W. L. (1789). *Fourteen Sonnets*. A Woodstock Facsimile(1991). Introduction.
- 10 Lovell, R. and Southey, R.(1795). 7.
- 11 14のソネットのほとんどどれにも、「悲しさ」が言及されている。
- 12 Southey, R.(1797). 139. (To Contemplation.)
- 13 Coleridge, S. T. (1796). *Poems on Various Subjects 1796*. A Woodstock Facsimile(1990). 45.
- 14 Bowles, W. L. (1789). 4.
- 15 Griggs, E. L.(ed.) (1966). 152.
- 16 コウルリジがT. プールThomas Poole宛に4本の自伝的な書簡を書き送ったのは、1797年のことである。
- 17 Curry, K.(ed.) (1965). 36.
- 18 Southey, R.(1797). Introduction. (J. ワーズワスの評。13ページの引用参照。)
- 19 Southey, R. (1796). *Joan of Arc, an Epic Poem*. A Woodstock Facsimile (1993). vi.
- 20 サウジーは、race, nationなどを使っている。このことは、「叙事詩」あるいは「ロマンス」の構成や展開に必要な仕掛けの意味合いが強いと思われるが、「民族」のサウジーにおける政治社会的意味合いも含めた役割に関しては、今後の検討課題としたい。
- 21 Sayers, F. (1790?). *Dramatic Sketches of the Ancient Northern Mythology*. By F. Sayers, M.D. Eighteenth Century Collections Online Print Editions. Literature and Language. 2. (The Descent of Frea, Act I. Scene. The Infernal Regions.)
- 22 Mays, J.C.C. (ed.) (2001). *Poetical Works I Poems (Reading Text)* (Part 1). 389-92. (The Rime of the Ancient Mariner, Part IV.). (The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge 16).

- 23 Sayers, F. (1790?). 2.
- 24 Mays, J.C.C. (ed.) (2001). *Poetical Works I Poems (Reading Text)* (Part 2). 681.
- 25 Lovell, R. and Southey, R. (1795). 37-9.
- 26 Curry, K.(ed.) (1965). 54.
- 27 *ibid.* 39.
- 28 Southey, R.(1797). Introduction.
- 29 fancyを空想と訳したが、「想像力」としたいところ。コウルリジは後にfancyとimaginationの根本的な違いを思想的に定義していくことになる。あえて「空想」という訳語を充てた。
- 30 Curry, K.(ed.) (1965). 37.
- 31 Lovell, R. and Southey, R. (1795). 62.
- 32 Curry, K.(ed.) (1965). 23. (1793年5月2日付の書簡の最後の部分参照。)
- 33 Southey, R. (1795). Introduction.
- 34 *ibid.* 71.
- 35 ‘The Eolian Harp: Composed at Clevedon, Somersetshire.’ Mays, J.C.C. (ed.) (2001). *Poetical Works I Poems (Reading Text) (Part 1)*. 231-35.
- 36 Curry, K.(ed.) (1965). 45.